

薄田泣堇の詩における言語空間

山岡 萬謙

倉敷芸術科学大学教養学部

(1997年9月30日 受理)

1. はじめに

日本の近代詩の開花は、島崎藤村の「若菜集」によって招来されたことはいうまでもない。この明治の新詩を新体詩といったが、それは、明治20年頃から30年頃までの約10年間が全盛期であった。その間、新体詩の質的向上に伴ない新体という名称はもはや不要となったのである。藤村は「若菜集」において、伝統的な詩想を基調として、青春の感傷的憧憬的な情熱を歌いあげた。それは清新で優雅な歌詞と哀調を帯びた格調であった。次いで「落梅集」には人生を対象とした思索的な沈静を帯びた詩風がみられる。この島崎藤村と対峙して双璧と称せられたのは土井晩翠である「天地有情」にみられる雄渾壮麗な詩風は、西洋の浪漫派の詩想を漢詩調で歌ったものである。このふたりを中心にした浪漫主義時代の詩は当時の青年の心をとらえ、熱狂的な好評をもって迎えられたのである。これらの詩には、封建思想のもとに抑圧された人間感情の解放感にあふれた喜びが表現されていたからである。

こうした日本近代詩の完成ともいえる藤村・晩翠時代に続いて、詩壇の中心となったのが薄田泣堇と蒲原有明であった。ふたりは、当時の社会情勢からみて、おのずから限度のあった浪漫詩を、象徴詩の方向にすすめたのである。泣堇は明治29年頃から藤村の影響を受けて、古典趣味の優雅な詩を発表して世に認められた。有明は明治30年頃から詩を発表し、初めは神秘的夢幻的な詩想を示し、後には象徴詩に転じたのである。

薄田泣堇はわが郷土が誇る大詩人であり文筆家でもあった。彼は明治36年頃から、藤村退壇後の日本近代詩の首座を占めていたといってもよい。そして、純情多感な浪漫詩人として、その詩は多くの若者に愛唱されたのである。明治30年「暮笛集」を、34年に「ゆく春」を発表して大いに名声をあげた。「暮笛集」においては、従来の7・5調の外に8・6調を用いて繊細な感情を歌い「ゆく春」においては、8・6調に7・4調、6・5調、6・4調を交えた複雑な詩形を試みている。その後の代表作として、明治38年に「二十五絃」39年に「白羊宮」を発表した。「二十五絃」は、叙情詩の外に史的叙事詩を含んでおり、「白羊宮」では、主として古伝説をそれに応じた典雅な格調で歌ったものであるが、他の一面には象徴詩の傾向も認められるのである。今回、研究対象にしたのは、この独自の古典的詩風を大成したといわれる「白羊宮」のうちの、「ああ大和にしあらましかば」と、「望郷の歌」と題される2編の詩である。これら2編の詩は、泣堇の最も代表的な作品である。古語や雅語などを自在に駆使して、回想的

な古典的詩風に浪漫的香気を注いだ詩風は、難解と言う評もあったが、幾多の青年を魅了してやまなかった。そこで、最優秀作品と定評のあるこの2編の古語と雅語とを検討し、泣菫の古典に対する摂取の姿勢を調査してみようと思うのである。「ああ大和にしあらましかば」はブラウニング「望郷の歌」はゲーテの、それぞれの詩から型を借りながら、文語定型詩を完成させた泣菫の功績は偉大である。彼と人間関係の深かった人物は、後藤宙外・島村抱月・与謝野鉄幹・尾崎紅葉・上田敏・網島梁川・厨川白村・芥川龍之介などである。以下、論述中にある詩の引用は「日本近代文学大系18」角川書店によった。

2. 「ああ大和にしあらましかば」の第1連

(朝)

ああ、大和にしあらましかば、	7音6音
いま神無月、	7音
うは葉散り透く神無備の森の小路を、	7音5音7音
あかつき露に髪ぬれて行きこそかよへ、	7音5音7音
斑鳩へ。平群のおほ野、高草の	5音7音5音
黄金の海とゆらゆる日、	7音5音
塵居の窓のうは白み、日ざしの淡に、	7音5音7音
いにし代の珍の御経の黄金文字、	5音7音5音
百済緒琴に、斎ひ瓮に、彩画の壁に	7音5音7音
見ぞ恍くる柱がくれのたたずまひ、	5音7音5音
常花かざす芸の宮、斎殿深に、	7音5音7音
焚きくゆる香ぞ、さながらの八塩折	7音5音5音
美酒の甕のまよはしに、	7音5音
さこそは酔はめ。	7音

文語の詩歌の特色は、7音と5音による音数律である。この詩形は、「暮笛集」や「ゆく春」の複雑な詩形と異なり、整然とした体裁の自由詩である。これは詩の内容の古典的・回想的・浪漫的なねらいを効果あらしめるものとして注目される。用語としては、助詞の「に」と「の」を多用して詩のリズム化をねらっている。一方、助動詞は極めて少く、「ましか」「ゆる」「め」3つが出てくるだけである。これは助動詞を多用すれば、饒舌を弄する結果となり、空疎な詠嘆の羅列となることを恐れたのであろう。したがって、名詞が多く用いられ、30以上も出てくるのである。名詞は、強い具体性をもって印象づけるねらいで、まさに言語空間の試みとして当をえた使用法と言えないだろうか。その名詞はほとんど古語であって、美的表現の名詞がほとんどである。この上代語系の詩語によって比喻を交えながら、古美術の世界に導入しようとした泣菫の意図がうかがわれる。

3. 「ああ大和にしあらましかば」の第2連

(昼)

新壘路の切畑に、	7音5音
赤ら橘葉がくれに、ほのめく日なか、	7音5音7音
そことも知らぬ静歌の美し音色に、	7音5音7音
目移しの、ふとこそ見まし、黄鶯の	5音7音5音
あり樹の枝に矮人の楽人めきし	7音5音7音
戯ればみを。尾羽身がろさのともすれば、	5音7音5音
葉の漂ひとひるがへり、	7音5音
籬に、木の間に、一これやまた、野の法子児の	7音5音7音
化のもののか、夕寺深に声ぶりの、	5音7音5音
読教や、一今か、静ころ	7音5音
そぞろありきの在り人の	7音5音
魂にしも泌み入らめ。	7音5音

第2連の中には地名を示す固有名詞がない。すでに第1連で「大和」「斑鳩」「平群」の各地名が出てくるのでその必要はなさそうである。これは大和全体の寺院の雰囲気醸成しようとしたのであろう。そして、白昼の初冬の静寂の中に黄鶯の声を表出し、読経の声を幻想的に感得せしめている。そこに見られる暗喩は古語の点出こそ最も効果的ではなかろうか。助詞「に」「の」は、前節と同じ効用で多く用いられ、助動詞は「ぬ」「まし」「し」「め」のわずか4つしかない。あとは10以上の古語による名詞を刻むように描出して、言語空間での効用をねらっている。それのみか、より効果的な造語「新壘路」「あり樹」まで用いて、泣菫の面目躍如たるものがある。なお、この2連では聴覚をモチーフにしている、1連に続いて7・5の音数律を保っている。

4. 「ああ大和にしあらましかば」の第3連

(晩)

日は木がくれて諸とびら	7音5音
ゆるにきしめく夢殿の夕庭寒に、	7音5音7音
そそ走りゆく乾反葉の	7音5音
白膠木、榎、棟、名こそあれ、葉広菩提樹、	7音5音7音
道ゆきのさざめき、諳に聞きほくる	5音7音5音
石廻廊のたたずまひ、振りきけ見れば、	7音5音7音
高塔や、九輪の錆に入日かげ、	5音7音5音
花に照り添ふ夕ながめ、	7音5音

さながら、緇衣の裾ながに地に曳きはへし、	7音5音7音
そのかみの学生めきし浮歩み、――	5音7音5音
ああ大和にしあらましかば、	7音6音
今日神無月、日のゆふべ、	7音5音
聖ごころの暫しをも、	7音5音
知らましを、身に。	7音

この第3連にも、「夢殿」という固有名詞だけが示されて、幻想世界を展開している。その幻想は、視覚と聴覚とが交錯していて、古語（名詞）が点綴されているのである。そして、この詩の特色の1つである、助動詞の少ないのも印象的である。「し」「し」「ましか」「まし」の4つしか用いられていない。無駄な語がなく、イメージの醸成に役立っている古語（名詞）は単なる概念や観念の羅列ではない。ここには言語空間のもたらす理想化された美の賛歌が精神的なものにまで昇華されているのである。大和の自然と芸術の傑作は、それを支える上代語系の詩語によって最高の創造を誇っているといえるだろう。もちろん、1連から3連まで7音と5音の音数律は自由詩でありながらも、定型を思わせる妙味あるリズムを構成しているといえよう。

5. 「ああ大和にしあらましかば」のまとめ

泣菫の詩にみられる古語は、新しい生命の息吹を注入され、蘇生されたものである。もちろん難解であるが、かえってそれ故に芸術性の高いものといってよい。以下に、「ああ大和にしあらましかば」の中の主な古語を摘出してみよう。

○ましかー反実仮想、未然形 ○神無備ー神を祭る所 ○ゆらーゆれる、4段、未然形 ○ゆるー受身、連体形 ○塵居ー塵がかかる ○白みー白くなる、連用形 ○淡にーはかなく ○いにし代ー過ぎ去った代 ○珍ー尊厳なこと、珍貴なこと ○黄金文字ー金泥で書いた文字 ○百済緒琴ー中国から渡来した竪琴の一種 ○斎ひ瓮ー神に供える酒を入れる壺 ○彩画ー濃彩を施した絵 ○恍くるーぼんやりする、連体形 ○常花ー永久に咲いている花 ○斎殿ー神殿 ○八塩折ー繰り返して醸成すること ○美酒ー味がよい酒 ○まよはしー乱れさせる ○新壠路ー新しく切り開いた路 ○赤ら橘ー赤く美しい実の蜜柑 ○ほのめくーほのかに見える、連体形 ○目移しー目を移してほかのものを見ること ○ましー推量、終止形 ○黄鵠ー燕雀目の鳥の名 ○楽人ー音楽家 ○戯ればみーふざける、風流めく ○尾羽ー鳥の羽と尾 ○籬ー竹や木で作って低く目のあらいかきね ○法子児ー法師にした子 ○化ー神仏が姿をかえてこの世に現われること ○声ぶりー声の調子、声の言いよう ○静ごころー落ち着いた心 ○木がくれー木のかげに隠れること ○諸とびらー両方に開閉する扉 ○ゆるにーゆるやかに ○そそ走りー静かに音をたてて走る ○乾反葉ー反りかえった木の葉 ○名こそあれー有名な ○諳ー暗唱する、知りつくす ○ほくるーぼんやりする、

うっとりする ○石廻廊—石造りの渡り廊下 ○振りさけ—ふり向いて遠くを見る、連用形 ○高塔—斎宮の忌詞で、塔 ○緇衣—黒染めの僧の正服 ○曳きはへ—長くのばす、ひきずる、連用形 ○かみ—以前、昔 ○学生—大学寮、国学、寺などで学業を習った者 ○浮歩み—爪先でしとやかに歩む ○聖ごころ—僧侶の心境 ○ましかは……まし—反実仮想一般の詩に見られるリフレインは「ああ大和にしあらましかは」が2回描かれているだけである。それゆえにこのことばが一層強く、首尾対応（朝昼晩の統一）を感じる。さらに、この詩には、修飾語（形容詞・形容動詞・副詞）が極めて少なく、乱暴とも思えるような古語による名詞を自由に駆使しているのである。ここで、注意しなければならないのは、この詩全体を構成する上代語系の詩語が奇妙に統一しているという点である。この奇妙な統一こそ、天才詩人泣菫の天才たる所為である。まるで古美術品に魅了させられる感を禁じ得ないのである。こうした形式美を通じて、詩の生命である内在律に達することができるこの詩は、芥川龍之介が評したように「完成した芸術品は何時までも生きる」と言えるのである。

6. 「望郷の歌」の第1連

(春)

わが故郷は、日の光蟬の小河にうはぬるみ、	7音5音7音5音
在木の枝に色鳥の咏め声する日ながさを、	7音5音7音5音
物詣する都女の歩みものうき彼岸会や、	7音5音7音5音
桂をとめは河しにも梁誇りする鮎汲みて、	7音5音7音5音
小網の雫に清酒の香をか嗅ぐらむ春日なか、	7音5音7音5音
櫂の音ゆるに漕ぎかへる山桜会の若人が、	7音5音7音5音
瑞木のかげの恋語り、壬生狂言の歌舞伎子が、	7音5音7音5音
枝の手振の戯ばみに、笑み広がりて興じ合ふ	7音5音7音5音
かなたへ、君といざかへらまし。	7音7音

この「望郷の歌」は7・5調による定型詩とみてよい。4連とも最後は7・7のリフレインからなっており、四季の統一と憧憬を強調している。有名な「ミニヨンの歌」の形を借りたものといわれているが、見事に換骨奪胎に成功しているといえる。この第1連に登場する人は「都女の物詣」、「桂をとめの鮎汲み」、「若人の恋語り」、「歌舞伎子の壬生狂言」の4組である。伝統文化が残る京の春の自然を背景にして、京都の風俗を中心にした人事を描いて妙である。ここでも地名は「蟬の小河」だけしか出ていない。しかし、「うはぬるみ」「日ながさを」「歩みものうき」「清酒の香」「春日なか」「瑞木のかげ」「笑み広がりて」など、読者に陽気で新清な感情を与える言葉を羅列して「かへらまし」という感動の基調を提示している。もちろん、この京の雰囲気は文語文による雅語がふさわしいし、それらの言語間の空間は、複合機能によって、典雅な京の都が演出されているのである。

7. 「望郷の歌」の第2連

(夏)

わが故郷は、楠樹の若葉仄かに香にほひ、	7音5音7音5音
葉びろ柏は手だゆげに、風に揺ゆる初夏を、	7音5音7音5音
葉洩りの日かげ散斑なる糺の杜の下路に、	7音5音7音5音
葵かづらの冠して、近衛快の神まつり、	7音5音7音5音
塗の轅の牛車、ゆるかにすべる御生の日、	7音5音7音5音
まだ水無月の祇園会や、日ぞ照り白む山鉾の	7音5音7音5音
車きしめく広小路、祭物見の人ごみに、	7音5音7音5音
比枝の法師も、花売も、打ち交りつつ頼れゆく	7音5音7音5音
かなたへ、君といざかへらまし。	7音7音

第2連は京の夏の伝統文化の粋と情緒を歌ってあざやかである。完全に古典の世界を描出し、平安京のみやびに浸らしてくれる。この京の都の夏の風物詩は何といても「糺の杜の神祭」と「水無月の祇園会」である。この二大神事を象徴するものとして、「牛車」と「山鉾」が現われてくる。そして、初夏の京都の自然美が、「若葉の香」という嗅覚と「柏が風に揺れる」視覚とで、新鮮そのものの一種の背景美をなしている。また、用意された「比枝の法師」と「花売」は、京文化を彩るものと見てよい。こうした古典的な理想美の中への憧憬として「かなたへ、君といざかへらまし」というリフレインがよくきまっているのである。古語の連系の妙味は、7・5調と相応じて、内容と形式との絶妙な結合を思わせてならない。

8. 「望郷の歌」の第3連

(秋)

わが故郷は、赤楊の黄葉ひるがへる田中路、	7音5音7音5音
稲搗をとめが静歌に黄なる牛はかへりゆき、	7音5音7音5音
日は今終の目移しを九輪の塔に見はるけて、	7音5音7音5音
静かに眠る夕まぐれ、稍散り透きし落葉樹は、	7音5音7音5音
さながら老いし葬式女の懶げに被衣引延へて、	7音5音7音5音
物嘆かしきたたずまひ、樹間に仄めく夕月の、	7音5音7音5音
夢見ごこちの流眇や、鐘の響の青びれに、	7音5音7音5音
札所めぐりの旅人は、すゝろ家族や忍ぶらむ	7音5音7音5音
かなたへ、君といざかへらまし。	7音7音

リフレインの中の「君」とは誰かという疑問がほとんど感じられない。このすぐれた絵巻物のような詩の中に、「君」すなわち「読者と一体になって没入しきっている」のである。ゲーテ

のミニヨンの歌の「君と共にゆかまし」と違う点は、泣菫の「故郷」とは、日本人のもつ精神的風土を象徴しているという点である。そこへ「かへらまし」といつている点に注意したい。時は秋、その秋の「もののあはれ」は、古典の情趣の世界である。しかも、そこに「札所めぐりの旅人」が出現する。こうした浪漫的な詩は、やはり音読すべきもので、それにふさわしいものが古語による点綴といってよい。しかも、ここでは「稲搗をとめ」「九輪塔」「旅人」という事実「葬式女」「被衣」「流眇」という比喻を用い、地上と天上との秋の夕方の対比も巧みであるといつてよい。

9. 「望郷の歌」の第4連

(冬)

わが故郷は、朝凍の真葛が原に楓の葉、	7音5音7音5音
そそ走りゆく霜月や、専修念仏の行者らが	7音5音7音5音
都入りする御講風ぎ、日は午さがり、夕越の	7音5音7音5音
路にまよひし旅心地、物わびしらの涙眼して、	7音5音7音5音
下京あたり時雨する、うら寂しげの日短かを、	7音5音7音5音
道の者なる若人は、ものの香朽し経蔵に、	7音5音7音5音
塵居の御影・古渡りの御経の文字や愛しれて、	7音5音7音5音
夕くれなゐの明らみに、黄金の岸も慕ふらむ	7音5音7音5音
かなたへ、君といざ帰らまし。	7音7音

島崎藤村はその詩集の序で「遂に新しき詩歌の時は来りぬ。……伝説はふたたびよみがへりぬ。自然はふたたび新しき色を帯びぬ。」といつている。明治20年代から30年代にかけての詩人は、みなこうした姿勢と気概をもって「民族のこゝろを飾れり」といつているように作詩したのである。この第4連での中心は「専修念仏の行者」「道の者なる若人」である。その背景が「霜月」「朝凍」「午さがり」「時雨」「夕くれなゐ」と推移して、形式と内容が相応じてリズムカルである。ここでも「伝説」「自然」が「よみがへりぬ」といえるのも、巧みな古語と古典的教養の賜といつてもよいであろう。この第4連では特に仏教思想の内奥に触れるような心情を示し、作者の精神生活をもうかがえると思われる。

10. 「望郷の歌」のまとめ

泣菫の詩の特色は難解な古語の使用という点にあることはすでに述べた。この「望郷の歌」においても、「ああ大和にしあらましかば」の詩ほどでないにしても、古語や雅語の使用は、古都京都の賛歌だけに、よけいに珠玉の配剤とも言えるのである。主な古語を摘出してみよう。

○色鳥一秋に渡ってくるいろいろの小鳥 ○咏む一吟じる。詠じる ○梁一川瀬に仕掛けた

魚取りの簀 ○誇り―活動し行動する ○鮎汲み―春に小さな鮎を杓で汲み取る ○小網―魚をすくい取る簀に似た網 ○らむ―現在推量の連体形 ○ゆるに―ゆるやかに、形容動詞・連用形 ○手振―手に何も持たないこと ○戯ばみ―ふざける ○笑み広がり―笑いくずれ ○手だゆげに―手がだるそうに、形容動詞・連用形 ○散斑―まだら模様のあるべっこう ○轅―車の前方に出ている長い棒 ○御生れ―賀茂神社、上賀茂神社の祭り ○水無月―六月 ○山鉾―山形の上に鉾を立てた山車 ○比枝―比叡山の延暦寺 ○稲搗をとめ―稲をつく少女 ○目移し―目移してほかのものを見ること ○夕まぐれ―夕暮れ ○懶げに―ものうげに、形容動詞・連用形 ○被衣―衣を頭にかぶること ○引延へ―長くのばす、下二段・連用形 ○流眊―横目で見ること ○青びれ―青味を帯びる ○すずろ―自然に心がひかれること ○そそ走りゆく―忙しそうに走り去る ○夕越え―夕方に山を越えること ○物わびしら―何となくわびしい ○涙目―悲しそうな目 ○御影―神魂、仏画 ○愛しれ―ひどく愛着心をもち ○黄金の岸―極楽浄土にあるという七宝の池の岸、煩惱を解脱した境地

ここで泣菫の言っている「望郷」とは、もちろん「京都」をさしている。しかし、四季の賛歌を描いたこの京の地は日本人の心の「ふるさと」と考えてよいと思う。日本の伝統を誇る文化と、そこに見られる自然美とは、等しく日本人全体のあこがれのものであり、それはすべて京都に集結しているからだ。そして、その形式が、古語でしかも7・5調によっている。7・5調は軽やかに連続していき、朗誦に適し、古来愛用されてきた形式である。日本の詩歌の歴史をみると、記紀の不定形から万葉の5・7調へ、さらに古今の7・5調へと変化して定着している。近代詩では、島崎藤村以後、5音7音による定型詩のさまざまな可能性が模索され、次の口語自由詩に発展していったのである。用語については何度も述べたように、伝統的な文語は、文章語として長く用いられてきているという絶対的な優位さがある。その文語は、日本伝統の詩歌である和歌・連歌・漢詩・俳諧などで洗練されてきて、近代詩に引き継がれたのである。泣菫が7・5調の文語定型詩を用いたのは自然であり、当時の常識であったのはいうまでもない。

11. おわりに

薄田泣菫は島崎藤村や西欧詩人の影響を受けて出発し、土井晩翠、蒲原有明と並称されて、明治詩史に一時期を画したことはいうまでもない。彼は近代的な感覚と官能とによる複雑な心を言語を通じて歌おうとして特別な詩法を用いている。これは古典的象徴詩とも呼ばれているのである。泣菫の詩のうち、今回論述した2編の詩の素材は、すべて作者自身の体験と観察とが随所に転用されているのである。そして、天平の古典美と平安京の伝統美を歌っているのである。およそ詩とは、藤村が言っているように「静かなるところにて思ひ起したる感動」である。詩語は、言語として定着したこと自体、作者の感動そのものである。泣菫の用いた古語や雅語は、彼自身の感動そのものとして尊重したいのである。なぜなら、それらは時空を越え

て、より遠くより深くより正確に古典の世界に誘ってくれるからである。

参考文献

- 1) 「日本近代文学大系」松村 緑，野田宇太郎，角川書店 昭和47年。
- 2) 「日本の詩歌」伊藤信吉，伊藤 整，井上 靖，中央公論社 昭和44年。
- 3) 「現代詩鑑賞講座」村野四郎，吉田精一，井上 靖，角川書店 昭和43年。
- 4) 「表現学大系17」弥吉菅一，ほか，教育出版センター 平成元年。
- 5) 「研究資料現代日本文学」浅井 清，佐藤 勝，松井利彦，明治書院 昭和55年。
- 6) 「鑑賞現代詩」吉田精一，筑摩書房 昭和36年。
- 7) 「薄田泣菫」松村 緑，角川書店 昭和32年。
- 8) 「比較文学講座」松浦 暢，清水弘文堂 昭和46年。
- 9) 「白羊宮考」福井大学学芸学部紀要 昭和33年。
- 10) 「日本詩歌の象徴精神」岡崎義恵，宝文館 昭和34年。

A Study of Susukida Kyukin's Poems

Kazunori YAMAOKA

Faculty of College of Liberal Arts and Science.

Kurashiki University of Science and the Arts,

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712, Japan

(Received September 30, 1997)

Susukida Kyukin was born in Kurashiki-shi. This fact brought me to study his poetical works. It was in 1900s that he was most active in writing poems. At that time he was reputed to be a great figure in the poetic circles in Japan.

He published a famous collection of his poems named 'Hakuyokyu' (Aries) in 1906. The best poems in it are 'A, A, Yamato nishi aramashikaba' (O that I were in Yamato now!) and 'Bokyo no Uta' (A Song of Nostalgia). In both of them he sings of the glory of ancient Japanese culture. From the standpoint of poetic phrasing, the former poem reminds us of Robert Browning, and the latter one reminds us of Johann Wolfgang von Goethe.

The scenes in the poems are Yamato (Nara district) and Kyoto. In his poetic diction he elaborately used the ancient Japanese language.

Studying the archaic words used in his poems, I attempted to prove how effectively he commanded them in making the poems successful. I hope that his excellent poems will be appreciated again here in his native place Kurashiki-shi.